パチスロ店に入ると以前よりも女性の姿が目立つ。地域によって違うのだろうが、特に駅に近い賑やかな通りの店では目立つ。1円パチンコが普及したこともあって、友人を誘い、遊び感覚で店に入っている人も多そうだ。今回の相談は、キャリアウーマンとして働く女性の行為を心配する同僚からだった。その同僚女性も依存症を巡ってある悩みをかかえていた。

理系研究派のA子さん 食品会社の開発部門に

相談してきたのは食品メーカーの研究開発に携わる30代の女性A子さん。離婚歴があり、相談時点では親と離れて一人暮らしだった。勤務地は、首都圏近郊。都市開発が進みにぎやかになってきたが、最寄駅から車で20分も動けば静かな環境。公園や緑が多い地域。研究開発棟は工場に隣接しているが、双方で働いている従業員の交流はあまりなかった。開発状況を報告し、モデル品の製造を依頼する時は、工場から現場責任者が研究開発棟にやってくるのが習わしだった。

研究開発部門は男性社員が半数以上だが、食品の購入者は圧倒的に女性が多いことから、近年は新商品開発にも女性の感性が必要ということで、大卒女性の採用が増えていた。A子さんもそのひとりとして入社した。

学んだことがそのまま生かせるという思いもあり、意欲的に取り組んだ。実家からそれほど離れていないことも、この会社を選んだ理由だった。大学生時代は都会で一人暮らし。ジョギングもできる職場環境も気にいり、もともと理系で静かに研究に没頭するタイプだったので、うってつけの職場だった。

模範と思えるBさんのプロジェクトチームに

入社10年を迎え、女性中心のプロジェクトチームの一員になった。ライバル社に対抗するためにこれまでとは違った商品はできないか、思い切って取り組んでほしい、という経営側の判断で作られた。メンバーは12人で女性が7人の組織。上司つまりプロジェクトリーダーは当然女性で40代のBさんが就任した。職制上では課長職だった。

3人のサブリーダーのひとりにA子さんが選ばれた。異動前に部

パチンコ依存 第11回

新「相談現場からの報告」

柏木勇一
産業カウンセラー・家族相談士

「正直すぎて完璧主義で たった一つの逃げ道を」

長から「Bさんが君を欲しいと言ってきた」と言われた。Bさんとは、それまで部署は違っていたが、はたから見てもてきぱきと仕事をこなす姿勢、何よりもその実績から、模範となる存在だった。周囲の評判も同様だった。

何度か「あの人って冷たい所があるよね。女性らしくないんじゃない」というわさは聞こえてきていた。しかし、A子さんの目からは、服装も派手さを抑えて上品だし、少し冷たいと感じるのも魅力的に見えた。自分よりは一回り上の年齢。近づきがたいが、何とか親しくなりたい、いずれはあのようなリーダーになりたい、という願いも強かった。

厳しい「指導」で軋轢 心配しBさんの家へ

Bさんの下で働くようになって2か月。A子さんはサブリーダーとして後輩を指導しつつ、独自の研究にも取り組んできたが、チーム全体に微妙な軋轢が生じ始めていたのを感じた。原因はリーダーのBさんにあった。指示する内容がかなり高度で、ついていけないとこぼすメンバーが増えてきた。

後輩が相談しても「それぐらいのことは自分で考えなさい。私だってそうしてきたから」「また甘えてくるの?あなたのような人はここではいらないわ」と冷たくあしらわれる、ということを、A子さんに打ち明ける人が出てきた。

「あなたはいいわね。リーダーに可愛がられているから」と、何人かのメンバーから言われた時は、「これはまずいな」と正直に思った。このままでは組織が機能しない。会社の期待に応えられない。どうしようと考えたあげく、Bさんに直談判することにした。

「そこは開けないでね」カーテンで仕切る隣室

仕事のことというよりは、職場のことでお話をしたい、という申し入れをBさんは何の抵抗もなく受け入れてくれた。どんな内容の話なのか分かっていたようでした、と後日A子さんは語ってくれた。Bさんは、「会社じゃなんだから、うちに来ない?」と誘ってきた。だれもBさんの私生活を知らない。独身で一人暮らしということは聞いていた。その誘いの言葉に驚いたA子さんだったが、興味もあり、すぐに話がまとまった。

日曜日の午前中、Bさんから地図付きで教えてもらったマンションを訪問した。低層だが、茶色と薄いグレーのコントラストが瀟洒な感じをかもし出していた。リビングとキッチン一体となっていて、一人暮らしには便利な間取りだった。

寝室があるのだろう。隣の部屋とはアコーディオンカーテンでしっかり仕切られていた。「そこは開けないでね。散らかっているから」といきなりBさんが語ってきた。「散らかっているなんて、きれいにしているんでしょう。職場でもいつもきちんとしているから」と応じたが、Bさんは何も話さないで、コーヒーを入れ始めた。アルコールランプを使ったサイフォン式メーカーがレトロ調で、次第にコーヒーの香りが漂ってきた。

「日曜日はパチンコよ」せっかくだから相談に

「日曜日はいつもはどんなことをしているんですか?私は必ずやるのが近所の公園の散歩。ウオーキングと言った方がかっこいいでしょうか。あとはショッピングかな」と語りかけた。いきなりBさんの口から飛び出したのは…

「パチンコよ。今日も夕方までには行く予定」

「パチンコですって?」

「そうよ。やっぱりびっくりするよね。もう5、6年になるかしら」と、Bさんは開き直ったように語った。せっかくだから聴いてくれる?というので「ええ、ぜひ。私で構わなければ」「もちろんよ。あなたをメンバーに選んだのは能力もあって信頼できる人と思ったから。ちょっと待って。トイレに行ってくるから」

研究と指導の板挟み ふと男性の会話から

Bさんが席を離れたそのスキに、アコーディオンカーテンをちょっと開いて隣の部屋を覗いた。開けてはだめよ、と言われるとよけい見たくなる人間心理をA子さんも我慢することはできなかった。瞬間、我が目を疑った。ベッドの上には普段着が無造作に投げられるように置かれていた。ジーンズとTシャツ、趣味の悪いと感じるような柄模様のオープンシャツなどは床に。ベッドの脇には複数のサングラスもあった。それだけを確認してさっとカーテンを閉じた。

トイレから戻ったBさんは次のようにパチンコを始めた理由を語り始めた。

自分は、学生時代から他人とのコミュニケーションがうまく取れなかった。しつけの厳しい両親だったので、勉強中心の子ども時代だった。打ち解けて話せる友人もいなかった（普通の子どもらしく自由に遊んだ経験がなかったのも、今の自分を作ったんだろうなと、つぶやいた）。ひとりで取り組める研究開発の分野は自分に合っていた。仕事が恋人になって結婚を考えることもなかった。

一人黙々と取り組める間は良かった。しかし、会社勤めはいつまでも同じではない。自分の力がついていく一方で、後輩を指導するという役割も生じてきた。いつまでも我儘は通用しないのは自分が一番分かっていた。

肩書も付き、教えるという業務もやらなければいけなかった。物わかりのいい後輩だけではない。中にはいくら丁寧に繰り返して教えても通じない若者もいた。自分の本来の研究に没頭できず、経過通り進まないことにイライラしてきた。吐き出す術を知らなかった。だれかと話したくても相手がいなかった。

こんな時、男性ならどうするだろうな、と考えた時。ふと、製造現場でシフト勤務している男性同士の会話が浮かんだ。「今日も行く？」「うん、ちょっと店を変えようか」「そうだな。新しい店の方が出玉のサービスがいいからな」。パチンコの話だった。

最初は慎重にホールへ 決めごとが段々と崩れ

そうか、その手もあるな、と思ったのが始まり。うっぷん晴らし、気分転換を求めて、日曜日の午前、おそるおそる店に入った。一回りしてから空いている女性客の隣りに座り、見よう見まねで始めた。

慎重に地域を選んだ。職場に近い所は当然避けた。車で少し賑やかな町に移動した。念には念を入れて化粧にも工夫し、変装とまではいかないが、服装も変えた。低価格衣料品店で様々なデザインの衣服を買いこんだ。運転中は必ずサングラスをかけた。

パチンコ店の騒音が逆に気持ちを慰めてくれた。しだいに集中していく自分がいた。モヤモヤがすーっと消えていった。ここで儲けるという思いはまったくない。職場のイライラを忘れる時間がほしかった。

平日は通うことはできないが、日曜と限定していた自分の中の決め事は簡単に崩れ、土曜日も変身する自分がいた。それは、今度のプロジェクトを任されるようになってからかな。自分にはチームをまとめる能力はないので、自己嫌悪と苛立ちが募る毎日になった。

当然毎回の出費は覚悟。独身女性としては高給という意識もあった。マンションの賃貸料が一番大きな金額。それなりに貯金もできる生活だったが、最近は貯金を増やすどころか、少しずつ取り崩していった。

「借金漬けになるとか、依存症にはならない」

話が、「もう少し家賃が安い所を探さなければと思っているの」と移ったところで、A子さんは、このままでは危ないな、と直感した。理性があり自己統制力もあるBさんだが、その長所も消えつつあるように感じ、心配だった。

「話してくれてありがとうございます。でも、このまま続けるつもりですか？」

「借金漬けになるとか、よく聞く依存症にはならないと思うの。甘いかしら」

「ええ、それは甘いんじゃないかと、わたしは、正直に思います」

「そう？ありがとう。忠告として受け止めておくわ。ずいぶん引き留めてしまったわね。やっぱりきょうも行きたいの。あなたもどう？」

「わたしは、ちょっと…遠慮しておきます。それより、きょうはやめておいた方がいいと思います。よろしかったら、今夜一緒に外食でもしませんか？」

「ありがとう。何だか身体が要求しているみたいなの。食事は今度にしてくれないかしら。また声をかけてね」

柏木勇一（かしわぎ ゆういち）

大学卒業後、会社勤務を経て、現在はEAP企業（Employee Assistance Program）でカウンセラー及び研修講師として活動。
厚労省認定産業カウンセラー、キャリア・コンサルタント、家族相談士、交流分析士

A子さんは説得は無理と判断し、すぐBさんの家を後にした。着替えするであろうBさんの姿を見ることはできなかった。

夫のアルコール依存で離婚した経験を話して

それから2週間ほど普通に時間は過ぎた。職場の様子は何も改善されたわけではなかったが、リーダーの事情を知ってしまったA子さんは、後輩メンバーの指導を手伝うようになった。特にA子さんがてこずっている若手社員には、さりげなく対応した。雰囲気はいい方向になったかな、と実感した。次は、Bさんのパチンコ通いを減らすこと。A子さんはある作戦を考えた。それは自分が苦しんできたことを隠さず話して、気づきを待つしかないということだった。

A子さんには離婚歴があったが、不仲で別れたわけではなかった。夫のアルコール依存症を治すために、主治医から「このままでは共依存になる。別居では相手にインパクトを与えない。正式に離婚すること。そして自立を待つこと」と助言されたためだった。依存症から抜け出せたら再婚も考えていた。

営業職の夫が依存症になったのは、厳しいノルマに追われる毎日のストレスからの一時的解放を求めて酒に走ったから。もともと酒は好きで強かった。入院も2回。職場に戻った。後は酒を飲まない毎日を送ることができるかどうかが課題になっていた。

多くの依存先があればゆとりが生まれるから

夫が依存症になった時、何とか助けようとあれこれ調べた時、ある精神科医の「依存症は一種の自立心がもたらした病」という説明を目にした。悩みを紛らわすための自分助けの方法の一面もあるという。

多くの依存先、つまりストレスからの複数の逃げ道があればゆとりが生まれるから依存症は避けられるという説に納得した。人間は多くの者や人に依存なくしては生きていけない、とも書いてあった。この依存症の背景を先に知っていれば夫を救うことができたはず、とA子さんは思った。病気になってしまってからでは遅かったが…。

アルコール、パチンコ、と依存の対象は異なるが、今ならBさんを救うことができるのではないかと思った。「食事は今度にしてくれないかしら。また声をかけてね」というBさんの言葉を思い出し、土曜の夜、外食に誘った。

「もうだめ。どうしたら」まだ間に合うと励ます

「職場ではいつもありがとう」と語って会話が始まった。パチンコの件を聞き出した時、Bさんは「何だか泥沼に入っていきそうなの。もうダメ。どうしたらいいか分からない」とつぶやいた。せっかくの食事がまずくなると思ったA子さんは「その話は後で。まず食事を楽しみましょうよ」と方向を変えた。

A子さんは「恥ずかしくて誰にも言えなかったことだけど」と断って、自分の離婚体験を話した。そして、依存症は自立心がもたらす病気ということを強調した。「後輩のわたしが言うのもなんだけれど、あなたは真面目すぎて、完璧主義で、その上気楽に話ができる人がいないから、たった一つの逃げ道を選んでしまったんじゃないかしら。いまならまだ間に合うと思うの。生意気なことを言ってご免なさい」と目を離さないで語りかけた。「あなたはまだ病気ではないし」とも付け加えた。ここは何の根拠もなく希望を述べただけだったが。

「またこういう時間を」これでいいとA子さん

ちょっと間をおいてBさんは静かに語りだした。「ご主人、いまどうしてるの?」と聞いてきた。質問の意味を測りかねたが、「分かりません。会わないように、連絡も取らないようにと言われていますから。もちろん心配です。どうしているか知りたいです。でも我慢しています」と答えた。

Bさんは「あなたも大変だったのね。今でも、そしてこれからも」と語った後で、「こんな豪華な食事ではなくてもいいからまたこういう時間を持ちたいわね」と少し微笑んで語った。そこまでで会話は終わった。「これでいい」とA子さんは思った。

ここで種明かしをすれば、A子さんがBさんのパチンコ通いを知ってからどうすればいいか相談を受け際に、A子さんの秘密を知り、2週間後の食事と語りかける内容をアドバイスしたのだった。